たのしい学び。本当の学び。大人も子どもも！— クラス便りとエッセイ

DISCE LIBENS!

山びこ通信

学校法人 北白川学園
山の学校
LVDVS COLLINVS

2015
Apr.-Jul.
春
学期号

しぜん 2~4　イタリア語 12　ラテン語 14　ウェブプログラミング　ロシア語 13
歴史　ギリシャ語 15　かいが 6　ユークリッド幾何　フランス語 13　数学 9,10
ことば 7,9　つくる 4,5　漢文　かず 8,9　ドイツ語 12　イベント 将棋道場 19　英語 9, 10~11
ロボット工作 16　山の学校ゼミ（社会 16 / 数学 11 / 調査研究 7 / 法律 / 生活と文化 / 倫理 9）

力があると思うゆえに力が出る

山の学校代表　**山下 太郎**

表題はウェルギリウスの叙事詩『アエネーイス』（5.231）にみられる表現です。

船による競技が最大の盛り上がりを見せる場面で、勝利を確信し全力を尽くすトロイアの漕ぎ手たちについてこういわれます。

このとき、喚声は倍に高まる。
　あとから追う船に全員が
熱烈な声援を送り、
　天空が割れんばかりの叫喚が響く。
こちらでは、栄光は自分たちのもの、
　栄誉は手中のもののはず、
手にできぬは恥、誉れのためには
　命を賭してもよい、と思う。
こちらには僥倖が力を与えている。
　力があると思うゆえに力が出る。

（岡道男、高橋宏幸訳、京都大学学術出版会）

下線部に当たる元のラテン語（Possunt quia posse videntur.）は、「自信があればこそ実力が発揮できる」という趣旨の名句として、今も欧米で用いられます。ウェブで調べると、英訳の They can because they think they can. も人口に膾炙しているようです。これを日本語で平たく訳せば、「できると思うからできる」となります。実に簡単明瞭。表現の点でも内容の点でも子どもにもわかります。

と思いきや、この言葉が名言として受け止められるのは、やはり内容が逆説的だからだと思います。以下は表題の言葉にヒントを得たエッセイです。

大人の常識に照らすと、「できると思うからできる」のではなく、「実力があるからできる」のであり、単に「思うだけではダメだ」となるでしょう。「努力」が強調されるのはそのためです。しかし、これは大人に通用する正論であり、子どもの場合は自信が何より大切で、それさえあれば実力は後からいくらでもついてくる、と私は思います。

子どもは人生経験が少なく、大人の目から見ればできないことだらけです。しかし、大人と違うのは挑戦する心で満ちあふれていることです。「面白そうだ。よし、やってみよう。自分にもできるはず」。これが子どもの自信であり、何かに挑む心がまえです。思えば、赤ん坊のときにも言葉を発したり、一人で歩けるようになったり、子どもは挑戦の連続で成長していきます。しかし、そのような自信や挑戦する心も、いつかどこかでしぼんでしまう可能性があります。あるいは逆に成長と共に自発的な努力を伴いながら、いつまでも輝き続ける可能性もあります。

この違いを生むポイントは何なのでしょうか。人生行路は様々な要因が複雑に絡むため、詳しいことは誰にもわかりません。ただ、私は幼児教育に携わる者として、何かに挑戦しようとする子どもに対し、周囲の大人がどのような態度を取るのか——自信をくじくのか、自信を守るのか——が決定的に大きな影響を与えると考えます（それゆえに幼児教育は重要な意味を持つと信じます）。

このことについて、一郎先生（先代の園長）は「ぐう・ちょき・ぱあ——完全を求める親——」（『山下一郎遺稿集』所収）というエッセイの中で、子どもの自信を守るコツを次のように述べておられます。

「今できないことを性急に求めるよりも、今できていることをまず認める。これが、わが子にやる気を起こさせ、自信を持たせるコツです。」

山びこ通信
2015 春 学期号
平成27年6月23日発行・通巻第48号
（平成15年7月第1号発行）

大人にとって子どもの未熟を指摘し、努力を命じるのは容易ですが、それは「今できないことを性急に求める」ことにほかなりません。「今できていることをまず認める」。大人にはなかなかこれができません。一方、大人が「今できていることを認める」なら、子どもは次のステップに向かって挑戦する気持ちになれるでしょう。

すでに何度か書いていますが、かくいう私がそうでした。小学校の低学年の頃、テストで 70 点をとったとき、一郎先生（父）は「7 つできて 70 点ということは、100 点と同じことだ」と励ましてくれたのです。私は時間内に 10 問中 7 つしか手をつけられませんでしたが、「手をつけた 7 つの問題のように残りを頑張れば、次は 8 つできるかもしれない」と。嘘のような本当のような記憶でしたが、上に挙げたエッセイの中に「70 点は 100 点よ」という小見出しがあり、そこを読むと子どもの名前こそ N 子ちゃんとなっていますが、「ああ、これは自分のことだな」と合点できるエピソードが記されていました。

父がそこで展開する議論は明快で、大人の完全主義が子どもの自信とやる気を阻害する、というものです。「初めから完全でなければと意気込みますと、あとで完全になりうる力を持っていても、実力をついに出し切れず低迷してしまうということは、よくあることです。何事にも、じっと待つ、こころのゆとりが大切かと思います。『親は完全でない。まして子どもが完全であるはずがない』。この気持ちが根底にあれば、子どもにもっとゆとりを持って接することができるのではないでしょうか。」

このこととの関連で申し上げると、小学校の勉強については、大人が 100 点（＝山頂）の位置に立って子どもを手招きするのではなく、0 点（＝ふもと）の位置から一緒に山登りを楽しんでほしい、と思います。そして、本当の勉強はここからここまでと範囲を限定するものではない以上、学校が「ここまでできたら 100 点」と決めた地点も通過点として軽やかに乗り越えて頂きたい、つまり、親も子どもとともに好奇心を輝かせ、どこまでも学ぶ気持ちを持ち続けて頂きたいと願います。大人がチャレンジする気持ちを失って、どうして子どもにそれを要求できるでしょうか。

学びの山を一歩一歩登る子どもとともに、自分も寄り添って一緒に学び直す気持ちを持てることは、大人にとっても幸せなことです。山頂からふもとの子どもを手招きするイメージでは、いらだちが増すだけです。子どもと一緒に立ち止まって景色を眺めたり、足下の草花を愛でたりしながら一歩一歩登るには、たしかに「心のゆとり」が不可欠ですが、それは学びの厳しさに対して「甘い」態度を取ることとは異なります。

以前にも書きましたとおり、私は小学校の高学年になるまで漢字の書き取りを父に見てもらいましたが、あるとき、口頭で出題された漢字について、一瞬「ん？」と考えてから正解を書いたことがあります。それを正解にカウントしてもらえず、「やりなおし」のリストに入れられたことが不満で、「ちゃんと書けた」と主張したのですが、「自分の名前がスラスラ書けるようには書けなかった」といわれたことがあります。学校の集団教育とは違い、家庭教育においては、こうした一人一人の指の動きや息づかいまで細心の注意を払って見守ることが大事であり、それはマンツーマンなら十分可能である、という一例です。

今、山の学校の母体である北白川幼稚園では、園児一人一人の「挑戦する心」を大切にし、毎日鉄棒や縄跳び、竹馬などに取り組んでいます。そこで最も大事な鍵となるものは、今例に挙げた意味での保育者の「目」であるといえます。それは子どもたちの一挙手一投足をていねいに見守り、ほめどころと励ましどころを正確に見極めるものでなければなりません。

子どもたちを励ますとは、けっして「がんばれ、がんばれ」と連呼することでも、やみくもに褒め続けることでもなく、昨日は鉄棒でここまでしか足が上がらなかったのに、今日はさらに上まで足をけり上げるようになった等の変化を正確に見極め、それを本人に伝えることです。

丁寧に見れば、子どもたちは毎日驚くほどの変化を遂げ、日々成長しています。しかし、その一つ一つの歩みは、見る目をもたないと「平凡」なものにしか見えません。目の前の課題を乗り越えようとして本気で打ち込む子どもたちが何より欲するのは、自らの挑戦の軌跡をそばでていねいに見守る大人の目です。私はそう信じ、目の前の園児たち、山の学校の子どもたち、さらには「子どものように」好奇心を輝かせる大人の人たちに接したいと願い、同じ志を持つ先生たちとともに日々試行錯誤を繰り返すのみです。道半ばではありますが、私たちの取り組みを応援してくださるすべての人とともに、これからもこの道を一歩ずつ歩んでいきたいと思います。

（山下 太郎）

——本誌を手にとって下さった方へ
山の学校は、**小学生から大人を対象**とした**新しい学びの場**です。
“**Disce libens.**（**楽しく学べ**）”がモットーです。中高生のための徹底した少人数指導のクラス、社会人のための語学クラスも充実。子どもは大人のように真剣に、大人は子どものように童心に戻って学びの時を過ごします。

「山びこ通信」は、その様子をお伝えすべく、学期毎に年三回発行しているものです（春学期は６月、秋学期は 11 月、冬学期は２月）。ホームページでも、クラスの様子やイベント（毎月開催・無料）の情報などを発信しています。学ぶことが楽しくて仕方がない！もし、そうした気持ちを本誌を通し、少しでも皆様と共有することができたとすれば、望外の喜びです。

お申し込み・お問い合わせはこちらまで
TEL: 075-781-3215
FAX: 075-781-6073
E-mail: taro@kitashirakawa.jp
http://www.kitashirakawa.jp/yama-no-gakko

発行元 学校法人北白川学園 北白川幼稚園・山の学校 京都市左京区北白川山ノ元町41
FREE PAPER

『しぜん』（A・B1・C1）　担当　梁川 健哲

今年度から増設された、C（月曜）の二クラス。それぞれ私と小坂先生とで担当致しております。B（木曜）クラスも一つ増え、益々活気が出て参りました。全部で五つあるどのクラスも、集まった仲間たちによって、独自のストーリーを展開しています。まずは、私担当分のクラスの様子からご紹介をさせて頂きます。

C1 クラスは一年生の仲間たち。クラスの最初には、日頃の発見を記録した「しぜん日記」等をもとに、活発な意見が交わされます。例えば「かたつむりは触ると目を引っ込めるけど、雨はどうして平気なのかな？」「てんとう虫は、どうしてあんな模様なんだろう？」などといった疑問についてです。

教室を出たら、気になったものを観察して書き留めたり、落ち葉や花びらを拾ったりしながら森を散策します。「あ、この道初めて曲がった！」サラサラ音を立てる落葉が一面に敷積もった竹林スペースに吸い込まれて行ったり、坂道の途中で突然遊びが始まったりします。

時には私の方からも遊びに誘います。「葉っぱで飛行機を作って飛ばしてみようよ！」うまく行くと滑るように飛ぶのですが、最初は墜落気味です。その様子を見ていたのか、ツバメがジャングルジムの上にいた私達のすぐ頭上を宙返りしてみせました。「『こうやるんだよ！』と言わんばかりだね。」みんなと笑います。そのうち「葉っぱキャッチ遊び」へと変わり、上から投げたり下で受けたり、代わる代わる遊びました。

ある日のA(火曜)クラス。連休明けで例によってどっさりと「しぜん日記」を書いてきてくれた A ちゃん。その中の一つに、海を渡って旅をする蝶、アサギマダラについての本を読んだ感想がありました。

発表の時間を終えて園庭に上がると、私達が「ひみつの庭」と呼んでいるビオトープガーデンで、ちょうどお水やりをされていた育子先生が呼び止めます。「今、アサギマダラが来てるのよ。」

まるで嘘のような偶然に目を丸くしていると、大きなアサギマダラが一匹、ゆっくり漂うように庭の中を周遊しているではありませんか。息を呑んで目で追っていると、すぐ前の植え込みで、羽を休め始めました。吸い寄せられるように一歩、二歩、忍び寄る A ちゃん。次の瞬間、アサギマダラは彼女の指の間で大人しくなっていました。驚くほど素早く、かつ、優しい手つきでした。そして、順番に手渡しし、アサギマダラのつるっとした羽の感触や、鮮やかな羽の色彩、胴の斑模様などを、みんなで確かめました。

その後、池の周辺でのカエル探し大会となりました。あちこちで鳴く声がたより。Aちゃんが3匹、T君は何と、素手で2匹捕まえました。

B（木曜）クラスは、ものづくりの好きな仲間たちが集まっていて、昨年度も工作をする時間が多かったです。動機が強いことは大いに喜ばしいことで、心ゆくまで応援したいと思っています。ただし、インドアな活動時間が多くなり過ぎたり、みんなが好きなことをバラバラにしているだけのような状況は避けたいです。個々の想いを汲みながら、かつ視野を広げ、好奇心の芽を膨らませられるよう導くことが、こちらとしての勤めであると考えています。初回からやはり「工作」のアイデアが口々に出てきましたので、出来るだけ材料探しに森へ出かけたり、工作そのものも青空の下で行うようにしています。

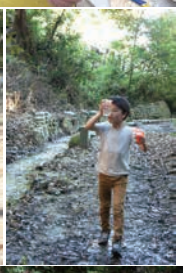
その効果も多少あったのか、Ｓちゃんと Ｔくんが木の枝をゴルフのパターのように使って、木切れや石の玉を打ち、的に当てるゲームを一緒になって考案しています。「みんなで外で遊べる仕掛け」としての工作に繋がればと期待しています。

その日の後半、みんなを沢へ誘いました。「行きたい！」という子も「え～、もうちょっとここで工作してたい～」という子も。残り時間も少なかったですが、それでもみんなで近道を通って沢へ向かいました。

沢が近づくと、ある地点で空気と匂いががらっと変わります。「うわ～水冷たい！」「これ汲んで帰ってお母さんにも触ってもらう！」「沢蟹いないかなあ、ねぇセンセ、この石持ち上げてみて～」「いないなぁ、あっちは？」「うわ～、いたいた！二匹！早く早く～！（バケツ！）」「砂の中に、キラキラしたのがいっぱいある！金箔の原料かなあ！」・・・。

「そろそろ戻るよ！」「ちょっと待ってよう～！」少し急ぎ足の、帰り道の石段。沢蟹の入ったバケツや水の入ったコップを運ぶ皆に、言いました。「じゃあ、今度はもう少し早めに行こうよ！キラキラも掬ってみようか・・・。」

みんなの好奇心を信じて、よかったと思いました。



『しぜん』（B2・C2）　担当　小坂 諒

「しぜん」では、B２・C２どちらのクラスでも、山の学校に生徒が集まったらすぐに校舎を出て、走って山へ向かうという授業スタイルを貫いています。自然の中にいると時間はあっという間に過ぎて行きます。「しぜん」の先生はもちろん私ではなく「しぜん」そのものです。出来る限り長い時間山の中で過ごしてもらいたいので、とにかく授業では雨が降っていようと時間ギリギリまで山の中で過ごすことにしています。どちらも初回の授業では私が自己紹介をした後は、すぐにノープランで山に入り、自由に山で遊びました。木に登ったり、チャンバラをしたり、落ち葉を集めたりと楽しみ方は人それぞれでした。２回目以降はそれぞれのクラスの特性を生かして生徒主体で授業を進めています。

B２のクラスでは、生徒達の秘密基地を作りたいという言葉をきっかけに秘密基地づくりを進めています。自然に男の子達が太い木をノコギリで切り、女の子達が細めの木を支柱に立て掛けていくというふうに役割分担して、すぐ形になっていきました。全員が入れるぐらいに大きくして、最後は屋根になるシートを被せて完成です。完成したら、みんなで中に入りお湯を沸かし山で採れたもので何か飲むことができたらなと考えています。何も言っていないのに秘密基地の中で使う椅子をつくったりと、山では生徒達の行動力や想像力が自然と上がっているような気がします。

Ｃ２のクラスは、生徒のみんなが１年生の男の子ということで、とにかく元気なので付いていくのが精一杯です。初回の授業では雨ということもあって奥まで行けませんでしたが、その反動もあって２回目の授業では時間がある限り山を突き進んで開けた場所でひたすら遊んで、落ち葉で埋もれた口急な坂を滑って校舎に戻ってくることにしました。開けた場所を見つけると生徒達は私が何も言わなくても、自由に自分たちで遊び方を考えていました。

この機動力を生かして今後の授業でも、とにかく山を突き進み毎回違う場所へ行こうと考えています。川まで行って焚火をしたり、隔週で８０分という限られた時間なので、山でしかできないことを出来る限り経験してもらいたいです。

中学、高校とあがるにつれて自然の中で過ごす時間は少なくなるものです。長い時間を空けて、大人になってから次の世代に自然のなかで様々な経験をしてほしいと思うのは自らの幼少期の貴重な経験があってこそです。そのもとになる経験を積むことが「しぜん」という授業なのではないかと感じます。自然に対する畏怖と尊敬の念を抱いた大人になるには、多感な幼少期に山で様々な経験をした過去が必要だと思います。

「しぜん」では、目的を持って山に入るのではなく、山に入る事が目的です。その先は「しぜん」という偉大な先生が生徒達になんでも教えてくれます。

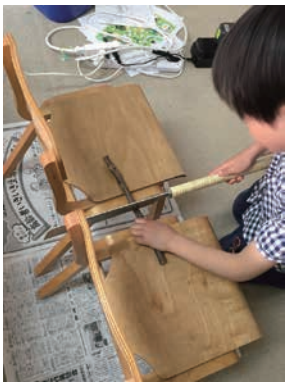
『つくる』（5～6年）　担当　福西亮馬

このクラスには 4 人の生徒が参加してくれています。初回は顔合わせでは、紙パイプを巻く『ひねもすキット』で、ブリッジを作りました。その強度を課題にしたところ、彼らは時間の許す限りぎりぎりまで工夫を凝らしてくれました。そうしてできあがった橋の上に、おもちゃのリモコンカーを通過させる実験を繰り返しました。生徒たちは、ひとしおの達成感と一緒に、それまで以上の結束を得たようでした。

2 回目と 3 回目では、音を課題にした電子工作をしました。最初は導線電話を作り、次にインターホンを作りました。片方のスピーカーを口に、もう片方のそれを耳にあてがいます。「アー、アー、アー！」「聞こえますか？」――しばらくの沈黙。その空しい無音状態で、地声に何度だまされたことでしょうか。電源、配線、接触を点検してから、再度スイッチを入れてトライします。「あ！」と喜色を浮かべたのも束の間、「ああ～」とまた落胆に変わる、雑音による手ごたえ。繰り返す空耳。そして、ようやくスピーカーがはっきりとした音量で話し始めました。思わず「やったー！」となりました。もちろん 1 回で成功すればスマートな出来事だったのには違いないのですが、それまでの無音も雑音もひっくるめて、ドキドキした経験でした。

「次は一緒に何を作ろうかな？」と、私もそれを考えることがいつも楽しみです。

『つくる』（1年・2～4年）　担当　小坂 諒



１年生のクラスでは、最初の授業で「道具の使い方を覚える」ことを目標として、特に何を作るか考えずにみんなで森に落ちている木や竹を取りに行き、ノコギリ、ドリル、彫刻刀を使って拾ってきた材料を加工しました。案の定、初回の授業では生徒が 2 人とも彫刻刀で指を切ってしまいましたが、これで刃物をどう扱えばいいかわかってくれたようです。小学生のものづくりに怪我はつきものです。しかし２回目の授業以降は、彫刻刀を使うことに恐れるどころか、逆に怪我をしたからこそ、それを使いこなしたいという気持ちが２人ともにあるようで、一心不乱に木を削っていました。

「今日は彫刻刀が私に優しくしてくれた」という生徒の発言が非常に心に残っています。子供の頃は道具の大切さや危険さを学ぶ機会が少なく、最近は子供を危ないものから無理に遠ざけているような時代になった気がします。危ないから使わせないのではなく、危ないからこそ正しい道具の使い方を教える必要があり、その先に道具や技術に対する深い理解があると考えています。危ないものは危ないと自ら感じて学ぶべきです。そして最も簡単に深くそれを教えてくれるのは刃物でしょう。

というわけで、１年生の「つくる」では彫刻に挑戦していこうと考えています。生徒 2 人、講師１人という少人数の授業だからこそできる授業をしていきます。

２～４年生のクラスでは、工作が大好きで得意な生徒達が集まっており、「今日なにつくるの？」と聞いたらすぐに自らアイデアをどんどん形にしていくので、私は先生というよりちょっとしたアドバイスをするだけで十分なようです。

この授業では試行錯誤というプロセスを踏むことに重きを置いています。ですからあえて一筋縄ではつくれないものを選んでいます。構造はシンプルで完成させることは簡単なものだけど、うまく作るにはアイデアや何度も挑戦することが必要なものを作っています。例えば初回の授業で作ったチラシのみを使った吹き矢は、完成させる事自体は非常に簡単ですが、うまく飛ぶように作るのは大人の私でも時間がかかりました。まずはとりあえず作ってみて、どうしてうまくいかないかを考えて、それを改良するというのがものづくりの醍醐味だと思います。２回目の授業ではパチンコを作りましたが、これもとりあえず作っただけでは上手くいかず、また飛ばし方にもコツがあったり、飛ばす石の重さにも良し悪しがあったりと、生徒達のアイデアを借りつつ改良して最後には上手くいきました。

とはいえ、試行錯誤を取り入れたものづくりというのは２番目の目標であり、やはり１番の目標は生徒達の「**〇〇をつくりたい！**」という強い思いを実現させ、純粋にものづくりの楽しさを今まで以上に感じてもらうことです。

『かいが』（A・B）　担当　梁川 健哲

クラスでは基本的に、生徒たちが「今日はこれをしたい」と心に抱いて来た場合、それらを実行してもらっています。そのような「自由制作」は、たとえ単発で終わったとしても悪くないと思いますが、大抵の場合そうはならず、自ら定めた「自由課題」として探求が続けられます。

例えばK君は今、歴史が大好きで、本棚から持ちだした資料をじっと見つめては、戦国武将などの人物を描くことを繰り返しています。それでも飽き足らず、架空の人物も登場し始めました。「この人は何藩、何代目藩主で、この人達は仲間で、あの人とは大老の地位を争っていて…。」物語好きな点で、彼と気の合うS君は、既に昨年度、自作漫画のシリーズものを完成させており、今年度は温めている別のシリーズや、新作に取り組む模様です。二人が語る口調も描く線も、そして人物の表情も、生き生きしています。

また、ある日は教室へ着くなり「今日は図鑑を作るの」と言って、FちゃんはAちゃんと一緒に庭に出て、咲いている薔薇を描き始めました。小さめの紙に、次々と見つけた花々を描いていきます。「私も」と言って、後から来たRちゃん、Sちゃんも画板を広げます。「鉄は熱いうちに打て」という通り、「今」その子が大事に思っていることを大事にし、まずは思いの丈を解き放って欲しいです。

何を描こうか心が定まっていないときは、話し合いながら課題を一緒に考えたり、こちらから提案したりします。ある日のクラス、室内で「木を描いてみよう」という課題に挑戦してもらいました。「先生、どんな木でもいいの？」「勿論。」「木じゃないものも描いていいの？」「いいよ。『木だけを描こう』とは言ってないからね。」「茶色ってどうやって作るんだっけ…」「さあ、どうかな？試してごらん？」赤、青、黄、白の絵の具しか使わない、というのもこの課題のルールです。「不自由に感じますか？　自由って、何でしょうねぇ…」そんな問答をしながら。

その他の日は、先述のような「自由課題」と、屋外での制作を中心に過ごしています。「外に出て、何かいいなぁと思うものを見つけようよ！」「色や形をよく観察してごらん、面白い発見があるよ！」最初に私からかける言葉はその程度で、あとは個々に応じて生き物の「観察図鑑」のかたちをとったり、風景画になったり、空想と入り混じったりしていきます。

自由はみんなが見出すものです。このクラスでは「描く」という手段を用いて。そのためには、チャレンジする気持ちも必要だということに、いつか気がついて欲しいです。私ができるのは、そのためのきっかけを作ることくらいです。この一年も、みんなの応援係に徹していきたいと思います。

『ことば』（1年）　担当　小坂 諒

このクラスでは、生徒が絵を描くことが好きなので「絵」と「ことば」を組み合わせた簡単なゲームができないかと思い、絵を使ってしりとりをする「絵しりとり」をやっています。ルールは簡単で、まず誰かが絵を描きその□絵がなにかわかった人が絵の下にその名前を書くという非常にシンプルなゲームです。普通のしりとりと違い「思いついたけど絵にできない」や「この絵はなんだろう」というように、ただ次の言葉を思いついただけでは進まず、あっという間に1時間が過ぎてしまいます。言葉を絵にする必要があるので、一緒にやっている私もなかなか手こずっています。ただ、「今日はなに描くか２つ決めてきた！」と言って来てくれたりもするのに、しりとりというルールだとせっかく決めてきたものを描けなくなってしまうので、おかしいかもしれませんが進めていくうちに好きな絵を描いてそれをあてて名前を書くという、よりシンプルなゲームになっていきました。そこから派生して、現在はボールと足の絵を描いて「ボールをける」と書くように、一つの名詞だけでは表現できないものを描いています。

とにかく絵を描くことが好きなので、時間いっぱい絵を描いて欲しいと思うので、徐々に一度に絵を描く量を増やしていき、最終的には自作の絵本を完成させることができたらなと考えています。

『ことば』（2～4年）『ことば』（2～3年）　担当　福西 亮馬

「2 ～ 4 年」クラスでは、昨年度から引き続き、百人一首の暗唱をしています。これまでの二十二首に、この稿を書いている時点で、五首を追加しました。この調子で、三十首までなじみを深めてくれればと思います。

さて、さっそく百人一首の試合がしたくて腕が鳴るという生徒からの要望があり、今学期は 2 週間連続で「かるた会」を開きました。

一年前は「下の句」を読んでようやく手が動き出すというのが当たり前の光景でしたが、最近では「上の句」の間に取る様子が普通に見られるようになってきました。嬉しいことです。また、自分の得意札だからと言って、うかうかしてもいられなくなってきました。一字決まりの「むすめふさほせ」もマークが厳しくなり、だんだん当たりがきつくなってきました。最後にあと 1 枚というところで逆転されたり、逆に 2 枚差で突き放したりといった、高レベルな展開も見られるようになってきました。

とはいえ、まだまだ「覚えた者勝ち」の世界ですので、ぜひ「今がチャンス！」と思って、好きになった歌を片端からマスターしてほしいと思います。

また初回や最近に書いてもらった作文でも、生徒たちの持ち味がよく出ています。それを山の学校のブログに掲載していますので、どうぞご覧ください。

「2 ～ 3 年」クラスでは、「鞭声粛粛夜河を渡る」のフレーズで有名な、頼山陽の『川中島』を暗唱しています。昨年度は『孫子』の暗唱をしていましたが、武田信玄がそれを愛誦したことからのつながりです。そこから派生して授業中では戦国時代や源平合戦について話す機会も得ました。

絵本では、特に生徒たちが好みそうな、いかにも怖そうな絵のものを集めてきて読んでいます。『みどりのしっぽのねずみ』（レオ・レオニ／作、谷川俊太郎／訳、好学社）は、不気味でどこか教訓めいたお話でした。『鬼のかいぎ』（立松和平／文、よしながこうたく／絵 、新樹社）は今昔物語ベースのどこか割り切れないお話でした。また『巨人にきをつけろ！』（エリック・カール作、もりひさし訳、偕成社）は最後にナンセンスな怖さがありました。

どの本でも次のページをめくるたびに、決まって「分かった！ それはこういうことや」と合いの手が入ります。四人の生徒が四人ともたがいちがいに発想を述べてくれるので、その反応に飽きることがありません。そのように集中し、お話の世界に入り込んで見聞きしてくれていることが嬉しく、私もとても読み応えを感じています。

一方、2 年生になってからより盛んに始まったことに『推理クイズ』があります。「はい」か「いいえ」で答えられる質問をしながら状況を言い当てるというものです。1 年生の時よりもその質問が上手になってきました。また『漢字』も去年と同じく興味を持ち続けて書いています。そしてその都度、書いた紙をホッチキスで留めて「本にする」というこだわりを見せてくれています。

この時期はバラエティに多感な時期だと思います。様々な印象に触れて、書いたり読んだり、また発表したりすることの意欲を蓄えていってほしいと思います。

『かず』（1年）『かず』（2年）『かず』（4～6年 B） 担当　福西 亮馬

1 年生と 2 年生のクラスでは、『迷路』と『間違いさがし』をよくしています。

『迷路』は、だんだん難易度が上がってくると、すらすら先へ進めることよりもむしろ、分岐点まで後戻りできること、経過の確実な部分を「セーブ」できることがコツになってきます。「場合分け」という技術的な課題がそこにあります。迷路は必ず解ける範疇の問題ですが、ゴールまでの見通しが立たないと、やる気もくじけてしまいます。そこで、分かれ道が「2 通り」とか「どんなに多くても 4 通り」というように、見通しが立っていれば、あとは「全体像を知りたい」という知的好奇心によって、自然と楽しさも増していきます。これは精神的な粘り強さとは別にある「目の付け所」というスキルです。細部に鉛筆を動かしながら、問題全体を広く見据えることは、たとえば今後、一冊の問題集を仕上げるにしても、ただ闇雲にぶつかりながら解くのと、「これは一種の地図作りをしているんだ」という、抽象的でもそうした興味を持ちながら解くのとでは、習熟度はおのずと違ってきます。A-1 の問題と A-2 の問題はどこがどう違っているのか。分岐点はどこか。それをよく認識することが肝要です。『迷路』はその種まきです。これからどんどん育ってほしいスキルだと思います。

ところで、人に考えを伝える時、頭の中にも一種の思考の『迷路』ができあがります。これはある 1 年生の女の子でしたが、鉛筆を動かしながら、私の耳元で述べてくれた自信に満ちた声が、今でも印象深く残っています。「私は最初こっちに行ったけど、駄目やったから、また戻って、こっちへ行ったの。でもやっぱり行き止まりやったから、また戻って、今度こっちに行ったら、行けたの！」と。おそらくその場で聞いていなければ、その生徒が何を言っているのか判然としないでしょう。けれどもそれはとてもリアリティがある出来事なのです。問題がフィニッシュできたことを何とか伝えようとする時の目は新鮮に輝いています。それをこちらも見ていること、そしてそばにいて一緒に喜んであげられることを、「かず」の時間では一番大事にしたいと思っています。

一方、『間違いさがし』では、答が「どこか」を見つけるだけでなくて、「どう違うか」という理由も聞いています。「こっちの方が 1 個多い」とか、「こっちはあるのに、こっちはない」とか、「こっちは出っ張ってるけど、こっちはへこんでる」など、言い方は様々ですが、何を違いとみなしたかを説明できることをクリア条件にしています。

そのように、『迷路』にせよ『間違いさがし』にせよ、「分かった！」を表現してくれたことに対し、「すごいなあ」と言って見ていることが、これからの学習意欲を支えるだろうと考えています。そして、やり取りをする中で、技術的な勝ち癖と、精神的な粘り強さとを、どちらも応援していこうと思っています。

最近では、少しずつ理屈の要素を増やし、足し算を使ったパズルや、ナンプレ（数字を決まったルールで置くパズル）などをしています。

さて、高学年である 4～6 年生では、そうした土壌の上に、『論理パズル』というものを導入しました。これは「もし」という仮定をおいて、矛盾があればその可能性を棄却し、矛盾がなければ答として採用する、という証明問題です。山の学校のブログで実際に生徒たちの解答を見ていただけると一番なのですが、生徒たちには単に答を言い当てるだけでなく、白紙の作文用紙に論述することに挑戦してもらっています。この「白紙」ということが重要です。『思考の迷路』の中でも一番負荷がかかるものと言えるでしょう。それがクリアできれば、もう何も怖いものはありません。

小学校の算数は、文章題ができれば得意になれるとよく言われますが、この『論理パズル』は、私が知るところでは、その究極です。ぜひ「考えることそれ自体」を好きになって、数学へとつなげてほしいと考えています。

『かず』（3年）『かず』（2～3年）　担当　吉川 弘晃

今年から、小学生の「かず」クラスを担当することになりました。学年にかかわらず、このクラスでは、「自分ひとりで頭を使うこと」の楽しさを体験することを大事にしています。小学校の授業と何が違うのでしょうか。小学校の算数では、1 つの答えを導くことが大事にされていますが、山の学校ではむしろ、その答えを出すために自分の頭をどれだけ使ったかを大事にしています。クラスでは、解答過程を生徒さんが講師に説明できるまで、問題を考えてもらうようにしています。

授業のパターンは様々です。迷路をしたり（速く解くために入口からやるか出口からやるかを考える）、数を使ったゲームをしたり（ルールを理解してどう勝てるかを考える）、文章題をしたり（規則性やルールを見つけて解き方を考える）しています。どの課題にも共通するのは、生徒さん 1 人ひとりにとって、自分なりの方法を見つけられるという点です。常にもがいて頭を使って楽しむこと。「かず」クラスの教室に広がる「楽しい必死さ」の前には子供も大人も関係ありません。

『英語講読』C（John Dewey, *Essays in Experimental Logic*）
山の学校ゼミ『倫理』,『調査研究』
『ことば』（4～6年）　担当 浅野 直樹

勉強のための勉強（学問のための学問）よりも、身近な問題に根ざした勉強（学問）という印象を強く受けました。

このような考え方はプラグマティズムと呼ばれます。英語講読 C（John Dewey, Essays in Experimental Logic）はまさにプラグマティズムを扱った書なのでそのような印象を受けたのかもしれません。しかもプラグマティックな動機でこの本を選んだので、なおさらそう感じます。著者がもしこのことを知ったら喜んだことでしょう。

倫理クラスでは江戸時代の日本思想を数回にわたって詳しく見たところ、現代にも驚くほどよく当てはまるという感銘を受けました。都市よりも田舎の生活のほうがお金がかからないし頑強になる、お金さえあれば何をしてもよいという世情になっている、平和な時代が長く続き家筋が固定すると生まれによって重用される人が増えてその人たちは何事もないようにと守りの姿勢になりがちである、といった荻生徂徠の記述などは現代のことを述べているのではないかと錯覚するほどです。

調査研究クラスではアイデンティティという切り口から現代の特徴を捉えようとしています。「友だちによって顔を使い分けるかどうか」、「『～とか』、『～みたいな』という言葉をよく使うかどうか」といった極めて身近なテーマから論が組み立てられている先行研究を参照しました。

ことば 4～6 年クラスでは自己紹介を書いて発表してもらうというところから今学期をスタートさせ、連休明けには作文を書いて発表してもらいました。書くことそのものはもちろん、発表して質問し合うというところに生き生きとした躍動感が見られます。この人はこういうことを考えていたのかといったことや、今何がはやっているのかといったことがわかり、純粋に参考になります。

『かず』（4～6年 A）　『中学･高校数学』A　『高校数学』　担当 浅野 直樹

この春学期から数学のクラスで就職試験に備えた内容も始めました。そこで今回は数学がどのように役立つかという話をします。

確率（場合の数）、１次方程式・不等式、関数などを仕事や生活の場面で使うことがあります。卑近な例を出すと、夏期講習の計画を立てるときには確率（場合の数）の考え方を使ってパズルを解くようにしています。その年の曜日配列、出講可能な講師とその担当科目が所与の条件で、そこから２クラスにするのか３クラスにするのか、どのような科目編成にするのかの可能性を全て洗い出し、最適なものを選ぶという作業です。もう一つ生活に密着した例を出すと、携帯電話などのプランを決めるときには、１次方程式・不等式

を立てて関数だとみなして視覚化し、計算で最適なプランを割り出すということを私はしています。もちろんサービスを提供する会社のほうでそうした情報は提供してくれますが、自分で計算をするとその数値を身体感覚に落とし込むことができます。

民間企業の就職試験で用いられる SPI や公務員試験などでは、こうした生活に密着した問題が出題される傾向にあります。これらの問題は中学や高校で習った数学で解くのが基本となります。それと同時に、要領よくパズル的な処理をするということも求められます。

かずクラスではまさにそのようなパズル的な処理をいろいろな題材で練習していると言えます。問題設定をしっかりと理解する、数字を間違いなく扱う、迷路などで理詰めにより一つの正しい道を見出す、考えられる可能性を網羅してありそうなものを選ぶ（あり得なさそうなものを除外する）といった作業です。

『中学・高校数学』B　担当　福西 亮馬

このクラスには、現在、中学 1 年生が 2 人来てくれています。とても真面目に取り組んでくれているので、分からないところはとことん付き合っています。2 人とも山の学校では小学 1 年生の頃からの付き合いで（もっと言うと幼稚園からですが）、その成長の軌跡を長期に見せてくれることを、日々、有り難いことだと思っています。

さっそく問題用紙を渡して、時間いっぱいに問題を解いてもらっています。そして、その日の達成感をもって、次の学習意欲につなげてもらうことが、このクラスの使命だと考えています。

『中学・高校数学』C　担当　吉川 弘晃

今年から、中学・高校数学の授業を担当することになりました。今年は、中学 1 年と 3 年の生徒さんが 1 人ずつ受講しているので、それぞれの学校の進度や個人の得手・不得手に応じて、講師が選んだ問題を解いて、答え合わせをするというスタイルを取っています。

中学数学の内容は、高校数学を学ぶ上での最も重要な基盤になります。最近は大学受験で数学を必須科目として課さないところも出てきたせいか、「自分は文系だから」と早々と理数系科目の勉強を諦めてしまう学生が少なくありません。しかし、高校 1 年、ましてや中学生が数学を諦めて自分の進路の選択肢を狭めてしまうのは本当に勿体無いことです。さらに、一部の大学が数学を入試に出さないことは、必ずしも、数学を勉強しなくてよいということではありません。例えば､経済学部では微分･積分の発展的な学習をしますが､そのためには中学で一次・二次関数を完璧にする必要があります。大学の他の文系学部でも、文章を読んだり書いたりする課題が大量に出されますが、そこでは「正しい手続きで論理的にものを考える」という数学的能力が非常に重要になってきます。こうした論理的思考は社会でも重要視されているため、民間・公務員を問わず、就職試験でも中学・高校数学は必須科目となっています。

但し、社会での必要性以上に大切なのは、1 単元でも良いので「面白い」という気持ちをもつことです。より多くの問題が解けるようになれば､それだけ数学的な考えが豊かになり､数学も楽しくなってきます。そのためには、問題文を注意深く読み、そこで問われているポイントを考えることが最重要です。言葉を使うという意味では、数学もまた「国語」なのですから。

『高校英語』（2年）『中学英語』（2年）『中学英語』（1年）　担当 吉川 弘晃

今や、学生時代に英語を習得することは、日本でも半ば当然のこととして見なされがちですが、英語を学べば学ぶほど、またそれ以外の特にヨーロッパの言語を学べば学ぶほど、英語の難しさを実感させられます。というのも、英語の文章を読むためには基本文法に加えて、非常に多くの熟語表現を暗記する必要があるからです。つまり、語学学習の肝は語彙の学習であるとよく言われますが、英語では特にその傾向が強くなるわけです。このことを踏まえ、私はどの学年の英語の授業でも、熟語表現の学習に重心を置いております。

ここで大切なのは、言葉の学習で習得せねばならないのは「単」語ではなく、「熟」語だということです。これは日本語でも同じで、小学校の授業では漢字を一文字ずつ学ぶだけでなく、それらを 2 つ 3 つ束ねた熟語として学んでこそ効果があるわけです。英語の場合、いち早く覚えるべきは、ask や think といった中学で習う基本的な動詞と前置詞（目的語があるかどうか）や動名詞（動詞が to 不定詞を取る場合と意味は違うか）、不定詞（前に to がつくかつかないか）などが結びつく熟語です（高校生以上は括弧内の文法事項の注意書きを例文を使って友達に説明してみましょう）。中学 1 年生は、1 学期のうちは教科書に出てくる単語を 1 つひとつ覚えるので精一杯かと思います。しかし、中学 2 年生以上は、単語の組み合わせた熟語のストックを頭の中に作っていくことを意識して勉強してほしいと考えています。

熟語の学習はインプットとアウトプットの両方を繰り返す、非常に骨の折れる作業です。単語帳やテキスト、問題集から単語をノートに写すのがインプットです。私は高校 1 年までこのインプットのみで満足していたため英語の成績は伸び悩んでおりました。日本語を英語に復元するアウトプットの作業がスムーズにできるようになって初めてその熟語を習得したと言えます。私は高校 2 年から、和文英訳の問題を解くだけでなく、添削してもらった解答を丸暗記することを繰り返すことで英語の成績が伸びていきました。アウトプットの機会は自分で作るだけでなく、皆さんの身近な場所に用意されています。中学や高校、さらには山の学校で行われる単語や英作文の小テストです。ここで死に物狂いになって満点を繰り返していくことが、語彙力上達への近道です。

各学年の授業についてですが、高校 2 年のクラスでは、1 年で習った英文法の事項を演習形式で復習しています。毎回、熟語暗記テストを行うことで語彙力増強にも努めています。中学 2 年のクラスでは、「アーサー王物語」の簡単な英文を訳読しながら、中学文法のドリル練習を行っています。中学 1 年のクラスでは、「イソップ寓話」の英文を読むために必要な基本的な文法と単語を授業とドリルの両方で学習しています。

語学の近道は地味ですが、この道を少しでも楽しい花道にできるよう、最大限サポートさせていただく所存です。

『高校英語』（3年）『英語文法』『中学英語』（2～3年）『高校英語』（1年）『中学英語』　担当 浅野 直樹

どのクラスにも共通して、それなりの時間をかければ文法はわかるようになってもらえるので、たくさんの英語に触れて語彙を増やすということは各自でやっていただきたいということです。

中学３年生では受動態、現在完了、分詞、関係代名詞といった難しい文法を習いますが、それまでに習ったことをおよそ理解していれば、練習と説明を繰り返すことで理解してもらえます。例えば、「向こうに立っているその少年は私の弟です」という文であれば、「その少年は私の弟です」が骨格となる文なので先に The boy is my brother. と文を作ってから、どのような少年かということを The boy の直後に付け加えて、The boy (who is) standing over there is my brother. とするとうまくいく、といった説明をしています。

実は中学英語で文法項目はほぼ出揃っているので、高校英語では特殊な表現を覚えることが増えます。それらは典型的な例文で覚えるのがよいです。Young as he is, he is never ruled by his emotion.（彼は若いのであるが、決して自分の感情に支配されない。）という例文で形容詞や副詞が文頭に来るという倒置で用いられる as は though の意味になるという特殊な用法を覚えるといった具合です。

ここまで文法ができれば大学入試の文法問題でも英検の準２級あたりでも簡単に解けます。あとは語彙ですね。これればかりは説明をして理解してもらうというわけにはいきません。単語集を使っても文章をたくさん読んでも他のどのような方法でもよいので、自分で語彙を増やしてもらうしかありません。必要や興味に応じてどこまでも進んでもらえたらと思います。

山の学校ゼミ『数学』　担当　福西 亮馬

このクラスでは、2 年前から続いて『虚数の情緒』（吉田武著、東海大学出版会）を読んでいます。約 750 ページまで差しかかりました。いよいよ 1000 ページのゴール、山の頂きが「点」で見えてきました。毎週この分厚いテキストを開く時に、半分以上の箇所を「パタン」と折るのが普通の光景になってきました。そこに折り筋ができてきたおかげです。これも物理法則ですね。

内容の主役は、第Ⅱ部までは数学でしたが、第Ⅲ部からは物理学になります。今はそのうちの古典力学の箇所です。人物ではガリレオとニュートンがずっと主役で、その合間に概説的に、フックが振動学、ベルヌーイが流

体力学、ボイルやシャルルが熱力学、そしてボルツマンが気体分子運動論に出てきました。（少しだけアインシュタインの特殊相対性理論も出てきました）。このあたりの章は、16 世紀以降の頭脳たちが、それぞれ興味を持った現象を解析するために「素朴なところから仮定を立てて出発する」という方法のオンパレードでした。考察にとって関連のあるものだけを理想化し、省きに省いて得られた結果。その抽象性の高さゆえに、仮定が成り立つ上でならば、その現象を分析する「単語」となりえる汎用性の高さ。裏を返せば、仮定による守備範囲をきっちりとすることの重要さ。これは受講生の M さんが指摘されたことですが、まったく「言葉」というものが持つ可能性と限界の話と同じだと思いました。

今年の 1 月末の山崎和夫先生の講演で、お話に伺った「ラプラスの悪魔」も登場しました。微分方程式で書ければ過現未のあらゆる情報が分かる、という当時の物理学者（哲学者）が抱いた夢の仮定であるわけですが、あわよくば不可知論を否定せんとする、その情熱の「出所」として、「調和振動子」というモデルを、今は見ている最中です。

『イタリア語講読』　担当　柱本 元彦

相変わらず三名の読書会という感じで進めています。冬学期に予定通りダンテの『新生』を読了し、春学期は何にしようかと散々悩みましたが、ダンテの次はやはり、というわけでペトラルカの『カンツォニエーレ』を選択しました。イタリア文学を代表するこの対照的な二人の詩人を精読することは、確かに貴重な経験ではないかと思います。とはいえなかなか簡単ではありません。一回の授業でソネットを三つか四つのペースです。『カンツォニエーレ』は三六六篇の詩を収め（序および一日に一篇で一年分）、大半が十四行詩のソネットですが長い詩もあります。全編が恋人ラウラに捧げられています。けれども初めての出会いから二十年後に彼女は亡くなり、二六七番からの『カンツォニエーレ』後半は、ラウラの死後に詠われた詩です。ともかくさすがに詩ばかりを読みつづけるのは大変ですので、今回、『カンツォニエーレ』はごく一部だけを読むことにしました。音楽が付けられた詩にしようと思って調べますと、もっとあるだろうと期待していたモンテヴェルディのマドリガルには四曲しかありません。ラッスス作曲のソネットが十曲、パレストリーナ作曲の三六六番が見つかりました。けれども一番の発見は、フランドルからやってきてヴェネツィア楽派の祖となったヴィラールトでした（モンテヴェルディの一世紀前の人物です）。彼はカンツォニエーレから二五篇のソネットに曲をつけています。たしかにポリフォニーの音楽から言葉を聞き取るのは簡単ではありませんが、素晴らしくきれいな曲です。ヴィラールトを聞いたのは初めてでしたから、これは今期の大きな収穫でした。

『ドイツ語初級』　担当　吉川 弘晃

今年からめでたくドイツ語のクラスが開講となりました。ドイツ語というと、名詞の性が 3 つあったり、格変化（名詞の文中での役割によって単語や冠詞の語尾が変化すること）があったり、主語が必ずしも最初に位置しなかったりと、英語やフランス語に比べて難しいという印象を抱かれがちです。
さて、突然ですが次の独文と日本語訳を見てみましょう。

Das ist ein von diesem Standpunkt aus zu betrachtendes Problem.

これは／（ある）／この／観点／から／考察されるべき／問題／である。

これは、教科書を一通りやれば読める文章です。下の訳は上のドイツ語文の単語をほぼ語順通りに逐語訳しただけです。「問題」という名詞に前から次々に修飾語句をつけていけるのは日本語話者からすれば、ドイツ語文法に親しみを感じられる点です。英語やフランス語だと、「この観点から考察されるべき」という部分は、名詞の後に分詞や関係詞の形式でつけるしかありません（ちなみにドイツ語でも、名詞の後に関係詞をつけられます）。

ここから分かるのは、ドイツ語は同じ内容でも様々な語順で表現できるという点で、「自由」な文法を有し、書いても読んでも話しても聞いても、楽しい言葉であるということです（ドイツ人は早口なので聞き取るのは私も苦労しますが…）。

授業では、大学で使う薄い文法教科書を 1 回に 2 課の進度で学習しています。この教科書は 1 年で終わらせることを想定に作られているので、生徒さんにとって予習・復習が大変になることは必至です。しかし、それでも 1 学期内で文法を終わらせんとするのは、ドイツ語という言葉の大まかな輪郭を生徒さんに早く掴んでもらいたいからです。どの言語であれ、インプットとアウトプットの繰り返しを数年間繰り返さなければ、文法事項は身に入りません。それならば、多少、切り残した木があっても、まずは森を一周するほうがモチベーションをもって学習が続けられるというものです。

関東地方やミッション系の一部の高校では、第二外国語としてドイツ語やフランス語を学ぶところもあります。

英語もままならないうちに、ドイツ語を始めたら頭が混乱するのではないかという声も挙がるでしょうが、むしろ多様な言葉の枠組みを知ることで、英語という言葉を違った角度から眺めることが出来るので、ドイツ語の学習は英語力の上達につながります。我こそはと思う方は、いつでもお気軽にドイツ語の森に遊びに来てください。

『ロシア語講読』　担当　山下 大吾

前学期まで主にプーシキンの抒情詩や物語詩を読み進めてきた当クラスですが、今学期は 19 世紀ロシア文学の掉尾を飾る作家チェーホフの短編に取り組んでおります。テクストは後期チェーホフの代表的短編として知られるいわゆる「小三部作」の第一篇、『殻に入った男』を読み終え、現在は次篇の『すぐり』を読み進めております。受講生は引き続き T さんと N さんのお二方です。

『殻に入った男』の主人公ベリコフは、ただでさえ行き場のない閉塞感があちらこちらに漂う 19 世紀末ロシアを背景として、「ああ、何も起きなければいいが」との口癖をこぼしながら、言いようのない抑圧の感情を他人に引き起こさせ、また押し付けずにはいられないギムナジウムの古典語教師です。彼の姿勢は一歩足を踏み外せば、数十年後のソビエト・ロシアで実現してしまったスターリンの粛清という恐怖政治に展開するものであり、またそれを象徴し予言するものとしてこの作品を読むことも可能でしょうが、少なくとも表面的にはベリコフの滑稽なほどの臆病な側面が印象深く心に残ります。結局彼も結婚を目の前にしながら、その結婚相手の何気ない口癖である「ハハハ！」という快活な笑い声が命取りとなって惨めな死を迎えますが、それはむしろ彼にとって何より代えがたい安息の場、棺桶という一歩も足を踏み出す必要のない理想的な「殻」の獲得に他ならなかったのです。

「散文のプーシキン」の名に相応しく、口癖のみならず何気ない仕草や表現がごく自然な形で随所に描かれることにより、自らリフレインの効果を醸し出す独特の文体。片々とした日常の一コマからある普遍的なものを抽出していく鮮やかな手際。チェーホフを読む喜びの一つと言えましょう。

これまで取り組んできたプーシキンの作品は全て彼の韻文による作品で、アクセントの位置や押韻などに厳しい制約があり、その点も絡んで講読のテクストとしてはむしろ後回しになってしまうのが通例ですが、漸く通常の講読スタイルの授業が実現致しました。毎回の授業では、擬人化により通常の格支配とは異なった形態が現れた例や、同形態で異なった意味にとれる例などロシア語に関する問題のみならず、日本語の「てにをは」に関する問題などが話題に上り、お二方の勉学に励むスタイルには益々磨きがかかってきたようです。

『フランス語講読』（A・B）　担当　渡辺 洋平

今学期も A、B ふたつのクラスでデカルトの『方法序説』を読み進めています。この授業が始まって 1 年と少しになりますが、A のクラスは終わりが見えてきました。残すところあと数頁となり、内容的にもまとめにはいってきています。最終章の第六部では、『方法序説』を書くことになったいきさつが述べられています。デカルトは当初、『世界論』という別の著作を公刊する予定でしたが、コペルニクスの地動説を支持したガリレオ・ガリレイがローマ法王庁で宗教裁判にかけられ、終身禁固の刑に処せられたことを知り、急遽公刊を取りやめます。デカルトもコペルニクスの説を肯定していたためです。そこで宗教上問題とならないであろう『屈折光学』『気象学』『幾何学』の三篇の論文を公とすることとし、『方法序説』は最後にその序文として書かれたものなのです。そのいきさつを述べつつ、学問における実験の重要性が強調され、また名誉よりも心の平穏を望むデカルトの人柄も垣間見ることができます。A クラスは、『方法序説』が読み終わり次第、ノーベル文学賞作家 J・M・G・ル・クレジオ（1940-）の *L'Africain*（2004）という自伝的エッセイをテクストにする予定です。

B のクラスは現在、第四部の後半を読み進めています。第四部は、デカルト自身があまりに形而上学的で万人が好むものでないと断っているとおり、『方法序説』のなかで最も抽象的で、内容的にも分かりにくい箇所です。特に推論によって神の存在を証明するいわゆる「神の存在証明」が行われますが、文章も無駄のない圧縮されたもののため、一読しただけで議論を理解するのは難しい箇所です。文法的にも直訳するだけでは日本語にはなりにくい劣等比較級の否定文や、虚辞の ne なども多く出てくるため、これらの文法事項に慣れないとなかなか文意がとれません。その他にも「知ることは疑うことよりも完全である」、「神とは最も完全な存在である」といった命題が自明とされているために、デカルトから時間的にも空間的にも隔たったところにいる私たちにはうまく飲み込めない部分もあります。とはいえ推論という知性の働きによって神を捉えようとする姿勢には、古代ギリシア以来のヨーロッパ文化の一面が表れているとも言えるでしょうし、その特殊性を認識しつつ、引き続きじっくりと読み進めていきたいと思います。

『ラテン語初級文法』（A・B）『ラテン語初級講読』（A・B・C）担当　山下 大吾

今学期は文法クラスが木曜夜の A クラスと土曜午前の B クラスの 2 クラスで開講されております。いずれのクラスでもこれまでと同様、教科書として岩波書店刊行の田中利光著『ラテン語初歩　改訂版』を用い、今学期と来学期の 2 学期全 24 回での課程修了を目指して勉学中です。ラテン語学習者の裾野が広がることは慶賀この上ないことで、受講の動機はそれぞれ異なりながらも、受講生の方々の学習意欲は毎回頂くご質問にもはっきりと反映されており、指南役としての責任の重さを痛感しております。様々なレベルにおけるヨーロッパ的現象を底辺から力強く支えているラテン語の魅力を少しでも分かりやすく、かつ可能な限り興味深く伝えられるよう努力致しております。

講読クラスは、A クラスではキケローの『アルキアース弁護』を、B クラスではホラーティウスの『書簡詩』を、C クラスではキケローの『友情について』を引き続き読み進めております。

C クラスでは全体のおよそ 3 分の 2 に当たる 64 節まで読了しました。受講生は変わらず Ci さんお一方です。64 節ではエンニウスの名言 Amicus certus in re incerta cernitur.「確かな友は不確かな状況で確かめられる」を再読する機会に恵まれましたが、この言葉を記し、後世に残そうとしたキケローの本意は果たしてどこにあるのかと再び考えさせられることになりました。

B クラスは前任者である前川先生から私が引き継いでから早くも 3 年目となりました。講読のテクストもセネカからホラーティウスに代わってやがて 2 年が経とうとしております。『詩論』から始まった『書簡詩』も終わりに近づきつつあり、現在 1 巻の 16 書簡を講読中です。これも受講生の Ca さん、M さんの熱意あってのたまもの、素直に頭の下がる思いです。対称的な語の配置も鮮やかな Romae Tibur amem ventosus Tibure Romam.「私は吹く風のように、ローマではティーブルを、ティーブルではローマを愛してしまう」（1.8.12.）というホラーティウスの浮気な考えには従わず、『書簡詩』読了後は同じ韻律である彼の『風刺詩』に取り組む予定です。

A クラスは前学期までの賑やかな状況から、受講生は A さんお一方という少々寂しい授業へと変化致しました。A さんご自身のご希望もあり、文法の復習も取り入れつつ一語一語読み進めております。

23 節で述べられる、「ギリシア語はほとんど全ての種族の間で読まれているが、ラテン語はその狭隘な領域内に限られている」という言葉は、アレクサンドロス大王の東征などによりギリシア語が優勢であった当時の地中海世界の状況を鑑みなければ、特に文字の面で字義通り世界を席巻してしまった、現代にまで及ぶその後のラテン語圏の拡大や西洋史的視点から判断するとむしろ奇異に響きます。その勢力の拡大に対して最も貢献したものこそ他ならぬキケローの残した文業なのであり、その彼も 14 節では、偉大なる先達ギリシアと伍する形でラテンという形容詞を添え（scriptores et Graeci et Latini）、まるで将来の自らの姿をしかと見据えたかのように、その偉業を誇らしげに讃えることを忘れてはいません。

『ラテン語初級』『ラテン語初中級』『ラテン語中級』『ラテン語上級』　担当　広川 直幸

●ラテン語初級　テキスト：Hans H. Ørberg, *Lingua Latina I: Familia Romana.* Grenaa: Domus Latina, 1991.

6 月 14 日現在、Capitulum XXIX の途中まで終了。

●ラテン語初中級：カエサル『ガリア戦記』講読

テキスト：O. Seel (ed.), *C. Iulii Caesaris commentarii rerum gestarum, Vol. I: Bellum Gallicum.* Leipzig: BSB B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1961.（PHI Latin Texts に収録されているものをテクストとして用いている）

W. Hering (ed.), *C. Iulii Caesaris commentarii rerum gestarum, Vol. I: Bellum Gallicum.* Leipzig: BSB B. G. Teubner Verlagsgesellschaft, 1987.

註釈：G. Laurén, *Caesar's Commentaries: The Complete Gallic War,* Revised Edition. Sophron, 2012.

6 月 14 日現在、第 1 巻 30 節の途中まで読了。

●ラテン語中級　テキスト：Hans H. Ørberg, *Lingua Latina II: Roma aeterna.* Grenaa: Domus Latina, 1990.

6 月 14 日現在、Capitulum LVI（最終課）の途中まで終了。キケローの『国家について』の第 6 巻「スキーピオーの夢」を読んでいる。2009 年の秋学期に開講して以来、ずっと *Lingua Latina* を用いてラテン語を学んできたこの授業も今学期でめでたく *Lingua Latina* のおしまいに到達する。第 1 巻に 2 年、第 2 巻に 4 年、合計 6 年の長丁場になった。一つの教科書を 6 年間学び続けるのは並大抵のことではないと思う。よい受講生にめぐり合えたことに感謝したい。あとは心の赴くままに原典を読めばよい。秋学期からのテキストは、まだ決まっていないが、今のところタキトゥスの『アグリコラ』にしようかなどと考えている。

●ラテン語上級：カトゥッルス講読　テキスト・註釈：D. H. Garrison, *The Student's Catullus*, 4th edition. University of Oklahoma Press, 2012. 途中で他の作品を読んだりしながら、6 月 14 日現在、第 16 歌まで読了。

『ギリシャ語初級』『ギリシャ語中級』（A・B）『ギリシャ語上級』　担当　広川 直幸

●ギリシャ語初級

教科書：C. W. E. Peckett, A. R. Munday, *Thrasymachus*: *A New Greek Course.* Shrewsbury: Wilding, 1970.

6 月 14 日現在、第 9 課の本文まで終了。

●ギリシャ語中級 A：『イーリアス』第 24 歌講読

テキスト：M. L. West (ed.), *Homeri Ilias, Vol. 2.* München; Leipzig: Saur, 2000.

註釈：C. W. Macleod, *Homer: Iliad Book XXIV*. Cambridge UP, 1982.

6 月 14 日現在、642 行まで読了。今学期終了と同時に『イーリアス』第 24 歌を読み終え、秋学期は他の作品を読む。何を読むかはまだ決定していないが、今のところアリストテレースの『詩学』が第一候補である。

●ギリシャ語中級 B：プラトーン『パイドーン』講読

テキスト・註釈：J. Burnet, *Plato's Phaedo.* Oxford UP, 1911.

C. J. Rowe, *Plato: Phaedo.* Cambridge UP, 1993.

6 月 14 日現在、110d まで読了。秋学期の前半には最後まで読み終え、その後はアリストパネースの『雲』を読む予定である。

●ギリシャ語上級：アイスキュロス『テーバイ攻めの七将』講読

テキスト：M. L. West (ed.), *Aeschyli tragoediae cum incerti poetae Prometheo*, Editio correctior editionis primae (1990). Stuttgard; Leipzig: B. G. Teubner, 1998.

註釈：G. O. Hutchinson, *Aeschylus: Septem contra Thebas*. Oxford UP, 1985.

6 月 14 日現在、437 行まで読了。

『新約ギリシャ語初級』　担当　堀川 宏

先学期から引き続き、土岐建治『新約聖書ギリシア語初歩』（教文館）を教科書にして、受講生 2 名と一緒に新約聖書のギリシャ語文法を学んでいます。名詞と形容詞、代名詞の学習を無事に終えて、今学期はいよいよ動詞の諸形態の学習に入っています。ギリシャ語は名詞・形容詞も難物ではあるのですが、やはり動詞の活用変化となると一段と難しい、というのが実感です。それでも弛まぬ練習の成果は確実に出ていて、基本的な活用にはずいぶん馴染んできたように思います。

授業で重視しているのは、文法（とりわけ語形変化のシステム）の体系的な理解と、練習問題で出てきた語形を出発点としての個別事例の蓄積です。言語の学習を進めてゆくに際して、単語や表現を場当たり的に覚えてゆくだけでは不十分で、個々の表現を成り立たせる規則を学ぶことで、学習の効率が上がることは間違いありません。しかし一方で、特にギリシャ語のように文法学習として膨大な変化表を覚えなくてはならない場合、そのすべてを一度に覚えようとすることは現実的ではありません。そこで、まずは例文や練習問題で触れた表現を、文法的な特徴に注意した上で、一つ一つ覚えてゆくということを勧めています。そうすることによって変化表を覚えるための足掛かりができ、記憶の助けになるからです。ギリシャ語の学習にはどうしても時間がかかります。今後も急がずに少しずつ、地道な勉強を続けて行って頂ければと思います。

教科書を使っての文法学習は、来学期の始めで一区切りします。その後は文法の復習を兼ねて、新訳聖書の原典（詳細は未定）をゆっくり読み進めてゆく予定です。

新任講師のご紹介

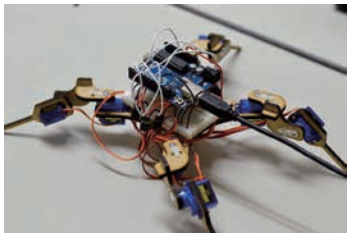
・**『新約ギリシャ語初級』**クラス担当（2014 年度 12 月～）

堀川　宏（ほりかわ　ひろし）京都大学文学研究科　西洋古典学専修

・**『しぜん B2・C2』『ことば 1 年』『つくる 1 年・2～4 年』『ロボット工作』**クラス担当（2015 年度 4 月～）

小坂　諒（こさか　りょう）京都工芸繊維大学工芸科学部造形工学課程意匠コース 4 回生

『ロボット工作』　担当　小坂 諒



このクラスでは、Arduino を使った４足歩行ロボットを製作しています。本来 Arduino では C 言語をベースとしたプログラミングが必要なのですが、最近では初心者向けの開発環境も整っており、プログラミングが未経験でも Arduino で気軽に電子工作をすることができます。このクラスでも ArduBlock という感覚的にコードが書くことのできるツールを用いて、Arduino の基礎から電子工作に挑戦しています。まずは LED を点滅させ、次はロボットの関節に使うサーボモーターを動かし、その次は複数のサーボモーターを、その次はロボットにモーターを組み込み歩くためのコードを考える、というように少しずつではありますが、段階を踏んでロボットを完成へと近づけていきます。とにかく難しいことは考えず、まずやってみるというスタンスで授業を進めています。みんなで一緒に作るのは４足歩行ロボットが歩くところまでで、それ以降は、制御基板を小さくしユニバーサル基板に半田付けしたり、各々がロボットにどんな動きをさせたいかや、載せたいセンサーなど決めてオリジナルのロボットを作っていく予定です。「プログラミング」「電子工作」という言葉はその分野以外の人からすると、とても縁の無い言葉に感じるかもしれませんが、「プログラミング」と「電子工作」は近年、分野の壁を超えて非常に身近になっており中高生どころか小学生でもコードを書く時代です。生徒達にとってこの経験が将来の視野を広くするものであってほしいと強く思います。

山の学校ゼミ『社会』　担当　中島 啓勝

この授業では以前より、グローバル化の進展と拡大に伴って二つの大きな「危機」が世界を覆っているのではないか、という視点に立って生徒の皆さんと一緒にニュースを解読し議論してきました。その二つの「危機」とは、政治における「民主主義の危機」と、経済における「資本主義の危機」です。具体的には、冷戦終結によって決定的な勝利を収めたかに思われた自由主義陣営、それを支える二つの中心的なオペレーション・システムである議会制民主主義と金融資本主義が、今、大きく動揺しているという見方です。

まず、政治に関しては、世界の至る地域で議会制民主主義の機能不全が叫ばれています。特に注目すべきなのは、直接民主主義的手続きに対する要求の高まりです。例えば昨年のスコットランド独立住民投票や、記憶にも新しい大阪市特別区設置住民投票など、極めて大きな政治判断が「民意」に委ねられる事態が同時多発的に起こっているのは、決して偶然ではありません。民主主義のあり方についての異議申し立てが行われていると言えます。

また、サブプライムローン問題に端を発したリーマンショック、そしてその世界的な後遺症は、金融至上主義的な現在の資本主義体制への疑念を生み出しました。いわゆる「ピケティ・ブーム」も、こうした疑念を背景に出てきたものと言えそうです。

どちらの危機にとっても注意しておかなければいけない重要な論点は、民主主義も資本主義も原理的なレベルでの挑戦を受けているのではないか、という点です。つまり、「直接民主主義になればより良い民主主義になる」とか、「金融資本主義は行き過ぎだから、実体経済を重視したちゃんとした資本主義を確立しよう」といった話では済まず、「民主主義は本当にいいものなのか、資本主義しかあり得ないのか」というレベルまで疑わなければならなくなったということなのです。

これをもう一つの側面から象徴しているのが、近年のイスラーム主義の台頭です。イスラーム圏の国々が全て一枚岩で、全てが民主主義と資本主義を否定しているわけではありません。しかし、イスラームの教えによって国家や経済を運営していこうというイスラーム主義の考え方は、究極的には民主主義と資本主義を相対化しようとするものです。グローバル化が進み、世界が緊密になればなるほど、こうした価値の相違は今以上に顕在化してくることでしょう。こうした対抗勢力に対して、民主主義と資本主義はそれでも自らの普遍性を主張できるのかが問われているのです。

このように、「民主主義の危機」と「資本主義の危機」は、どちらも内憂外患の様相を呈しています。この「山の学校（社会）」では、むしろこうした時代状況を、何にも安易に寄りかからず根本的な場所から考え直し、自分たちなりの思考を鍛える好機だと捉えています。日々のニュースを読み抜くリテラシーをつけるために、これからも創意工夫を凝らしていこうと思っております。

●講演会
古典の夕べ

『ギリシア文学の国際性、今むかし』

講師：中務 哲郎（日本西洋古典学会委員長・京都大学文学部名誉教授）

以下は 2015 年 2 月 21 日に行われた講演記録です。

中務先生は、西洋古典研究に生涯を捧げてこられました。京都大学文学部の名誉教授で、現在は日本西洋古典学会の委員長をされています。故松平千秋先生、故岡道男先生の衣鉢を継がれ、『イソップ寓話集』（岩波文庫）をはじめとするギリシア・ラテン文学作品の多数の翻訳や監修、西洋古典叢書（京都大学学術出版会）の編集委員をされてきました。昨年『ヘシオドス全作品』（京都大学学術出版会）により第 65 回読売文学賞（研究・翻訳賞）を受賞されたことは記憶に新しいところです。

講演の冒頭で、中務先生は、西洋古典を志すきっかけとなったご自身のエピソードをお話してくださいました。片岡桂子先生という、中務先生の中学生時代の担任の先生がおられます。その恩師のもとに、中務先生が大学を出たことを報告しに行かれた折、ある一つの物語をお聞きになったそうです。当時、夜間中学に転じておられた片岡先生は、戦争で教育の機会を失った人たちのクラスを受け持っておられました。そこに通っておられた年配の方が、こうおっしゃったそうです。「『太陽』という漢字を初めて習った、その次の日から、太陽が違って見えた」と。そのエピソードを、中務先生は次のように解釈されたそうです。「物の見方が変わるような勉強をしなさいよ。それは学校にいる間だけではなくて、これからもずっと必要になるものですよ」と。それを恩師からのメッセージだと受け止め、今日に至っているということでした。

このたびの講演では、「古代ギリシアにおいて、ギリシア文学がすでに国際的だった」ことをテーマにお話しいただきました。そして、その国際性が実現するプロセスと、影響のあった箇所とを、文献に残る具体例を通してご教示いただきました。

最初の内容は、文化（物語）の移動、国際化のプロセスについてでした。「文化」と聞くと、たとえばアレクサンドロス大王の東方遠征のように、大移動のイメージが真っ先に思い浮かびます。ですが、実際にはもっと小さなレベルにおいても集団の移動と融合とがあちこちに生じていただろうということでした。その小さな集団の例として、中務先生は、ヘーロドトスの『歴史』（1 巻 164、94、110 ～ 116 章）から、ポーカイア人と、サウロマタイ人の縁起の部分を引用されました。ポーカイア人は戦争によって移動を強いられた例で、サウロマタイ人（の祖となるリュディア人）は、飢饉によって移動した例でした。

仮に、五十人規模の軍隊が移動するだけでも、それに付随する酒屋、料理人、小売店など兵士相手に商売をする人とその家族も移動することになります。その中から言葉をすぐに覚える人も現れれば、物語の好きな人も混じっています。そうした人たちを介して、物語に代表されるような文化が移動していったのではないか、というお話でした。すなわち、小さな集団が奇遇する場では、本能的に同じ物語を、繰り返し聞いたり語ったりすることが好まれ、その結果として、異なる文化の中に同じ種が蒔かれ、時にはその民族のアイデンティティーを示すような物語（後で見る旧約聖書など）の枠組の中にも、共通のモチーフが浸透していったのだろうということでした。

次の内容は、ギリシア文学の国際的な影響についてでした。その例として、中務先生は、ホメーロスの『イーリアス』とアポロドーロスの『ギリシア神話』を引用され、その中にある二つのモチーフが、（文字による成立が）時代的に少し後になる『旧約聖書』の中にもはっきりと存在することを示されました。一つは『わざわいの手紙のモチーフ』、そしてもう一つは『パイドラー・モチーフ』と呼ばれるものでした。

『イーリアス』（6 巻 152 ～）には、トロイア方のグラウコスと、ギリシア方のディオメーデースとが、先祖同士が昵懇だったことを知り、矛を取り下げ、武具を交換して別れるというくだりがあります。その先祖を語る部分に、ベレロポンテースという英雄が登場します。そのベレロポンテースの物語の中に見られるのが『わざわいの手紙のモチーフ』と呼ばれるもので、それは以下の通りでした。

ベレロポンテースは、過って身内を殺めた罪を清めるために異国のプロイトス王のもとに身を寄せています。そのベレロポンテースに、プロイトス王の妻であるアンテイアが懸想をします。しかし彼女は自分の思いが遂げられないと知るや、夫にこう讒言します。「ベレロポンテースが嫌がる私を無理矢理に辱めようとしました」と。プロイトス王は怒り、ベレロポンテースを殺そうとします。ただし、当時のギリシア人のモラルから、異国からの客人は神様の化身かもしれないので、直接手をかけることは憚られます。そこでプロイトス王は、親戚である王に手紙を届ける役

目をベレロポンテースに言いつけます。（作者とされるホメーロスは文字を知らないことになっていますので、この手紙は「印」であるということでした）。ところで、その手紙には「これを持参した者を殺すべし」という意味が込められていました。ベレロポンテースはその危険な手紙を携え、何も知らずに使いに立ちます。そして相手方の王はその手紙を見るなり、彼を殺す方便として、キマイラという三体合体の怪獣の退治を命じます。（この後のベレロポンテースは、神助により有翼の馬ペーガソスにまたがってキマイラを倒しますが、その後も彼の運命は転変します）。

そして、上の『わざわいの手紙のモチーフ』が、『旧約聖書』（サムエル記下 11）にも見られることを教えていただきました。プロイトス王の役回りがダビデでした。彼はウリヤの妻バト・シェバと不義を交わし、彼女が自分の子を身ごもったことをごまかすために、ウリヤを戦いの前線から呼び戻します。しかしウリヤは自宅には立ち寄らず、ダビデの思惑は外れます。そこでダビデは不義を隠すことをあきらめ、ウリヤを殺す方法を記した命令書をウリヤ自身に持たせて、前線の司令官に送ります。ウリヤはそれがために死んでしまいます。聖書学の方では、これを『ウリヤの手紙のモチーフ』と呼ぶそうです。最終的に文書の形に纏められたのは『旧約聖書』の方が『イーリアス』よりも新しいけれども、物語としては『旧約聖書』の方が古く、それが何らかの経路をとってギリシアに伝わったのではないか、ということでした。

中務先生は、次に『パイドラー・モチーフ』を紹介されました。このモチーフは文字通りパイドラーの物語がその典型となったもので、先のベレロポンテースに懸想したアンテイアと同じく、「人妻の誘惑」という型です。アポロドーロスの『ギリシア神話』（摘要 1. 18 ～）から引用されたエピソードは、以下のようなものでした。

パイドラーはテーセウスの後妻でありながら、養子のヒッポリュトスに恋心を抱いてしまいます。しかしヒッポリュトスから拒絶されると、彼女はテーセウスに讒言します。そこでテーセウスがヒッポリュトスの破滅をポセイドーンに祈り、ヒッポリュトスの死につながるという展開です。そして、この類話がまた『旧約聖書』（創世記 39）の方にもあり、『ヨセフとポティファルの妻』のエピソードとして伺えるということでした。

面白いことに、この二つのモチーフは人々が好んで繰り返し語ったようで、たとえば『わざわいの手紙のモチーフ』の方だと、近代西洋においては『ハムレット』に入り、遠く日本の物語でも『宇治の橋姫』に現れるとのことでした。そして中務先生は、柳田國男が『遠野物語』でも「此話に似たる物語西洋にもあり、偶合にや」と東北地方の類話に対して註に書いていることを指摘されました。

ところで、小学生の子供たちに私は紙芝居をする機会があるのですが、その時に読んだ『ぬまのぬしからの手紙』（童心社）という紙芝居が、まさしくそれでした。この講演で「それがこれか」と知って目から鱗でした。

講演のレジュメに沿った内容は以上です。その後も、質問の時間をたくさん取っていただき、様々なお話を聞くことができました。

たとえば、これは男性の参加者の方からでしたが、次のような質問がありました。「『ヒストリエ』（岩明均、講談社）というアレクサンドロス大王時代を舞台にした漫画があります。その中で、主人公がギリシア系の植民地にいて、お店の人に、『クセノポーンのアナバシスの最新刊はまだですか』と聞くシーンが出てきます。そのように、ギリシア人は、本国の書物をあちこちの植民地でも読んでいたという国際性はあったのでしょうか」と。その後で、中務先生から『アナバシス』の世界にタイムスリップしたようなお話や、当時の本の流通事情を伺うことができました。

また女性の参加者の方からは、次のような質問がありました。「当時、書くことは石に彫り刻むという骨折り作業だったのに、なぜ人はそうまでして物語を伝えようとしたのでしょうか」と。そこで中務先生は、「人間には過去を記憶しておきたい、同じ話を繰り返し聞きたいという、いわば物語への本能ともいうべきものがあるからなのだろうと思います」と答えておられました。「個体発生は系統発生を繰り返すという説があるように、おそらく人類の歴史にも子供時代があって、同じ話を繰り返し聞くことをむしろ快いと思うような時期だったのでしょう」ということでした。

そこでふとこの講演自体が、もしかすると、実地にそのような出来事だったのではないだろうかと思い当たりました。中務先生は、引用された文章をただ読み上げることはされず、当時の習慣についての記述や、地名や人名といったカタカナの固有名詞が出てくると、そのたびに、「～というのは……」という言葉に続いて、臨場感たっぷりに説明されていました。たとえば、「『アッティカ』というのは、アテーナイというのがギリシアの首都ですが、そのアテーナイを含む地域をアッティカと言います。たとえば京都に対して近畿地方というようなものです……」であったり、「ギリシア人は洒落好きな民族で、『アマゾン』というのは、ギリシア語でマゾスが乳房で、アがそれを打ち消して、乳

房がない、という意味です。なぜならアマゾンたちは馬上で弓を引きますから、右側の乳房を邪魔だから自分から切り落としてしまったのです……」であったり。子供がお話の途中で「それは何？」と質問を繰り返すことがありますが、中務先生の語り口は、あたかもその質問に前もって答えて下さっているように感じました。そして私自身、知らず童心に返っていって、人に昔話をせがんでいる時のような温かい気持ちになりました。また、モチーフの共通する物語を重ね合わせて聞いていると、まるで一つの海の前に立って繰り返す波音を聞いているような落ち着きを覚えました。この稿では、その体験に関してあらすじをもって追うことしかできていませんが、もしここまでお読み下さった方には、ぜひともその時じかに聞いていただきたかったと思う次第でした。

他にも、アレクサンドリア図書館や古代の製紙事情のこと、写本や紙背文書の話、印欧祖語のこと。なぜギリシアのような小国がペルシャ帝国に勝つことができたのか、ギリシア人は何を頼みとし、武器にして戦ったのか。それについてのヘーロドトスの言説。また一方では贅沢で滅んだギリシア系植民都市シュバリスのことなど。参加者の次から次へと湧き上がる疑問にも中務先生は即妙に応じて下さり、長時間、多岐にわたってお話をしていただきました。

今振り返るにつけ、大変得がたい貴重な時間だったことに思いが至ります。ありがとうございました。

（福西　亮馬）

月例イベント 道場 『将棋道場』　座主　百木 漠

新年度になり、また新しい子供たちが将棋道場にも来てくれるようになりました。

いつもながら子供たちに伝えるようにしているのは、将棋は単に勝ち負けを決めるだけのゲームではなく、礼に始まり礼に終わる伝統的なゲームだということです。はじめの「お願いします」は実行してくれる子供たちがほとんどですが、勝負が終わったあとの「負けました」「ありがとうございました」というやりとりがきちんと出来る子供たちは意外と少ないものです。一生懸命頑張ったあとの勝負で負けてしまうのはとても悔しい。そんなときに自分から「負けました」と声に出して相手に伝えるのはなかなか難しいものです。

一般的なスポーツなどの勝負では、勝敗がついた瞬間に、勝ったほうがガッツポーズをして喜びを表すことのほうが多いでしょう。しかし将棋や囲碁などのゲームでは、勝敗が決したときに、勝ったほうが「勝った！」と言うのではなく、負けたほうが「負けました」と先に言葉を発します。それを受けて勝ったほうも静かに「ありがとうございました」と頭を下げるのが礼儀です。テレビでプロの対局姿などを見ていると、勝負がついたあと、勝った方も負けた方も静かにじっと感情を殺しているので、一見、どちらが勝ったのか分からないほどです。しかしそれが将棋や囲碁の世界での美学とされています。

将棋を始めたばかりの子供にはそうしたルールが分かりづらいかもしれません。もちろん子供どうしの対局ですから、ときには勝ったほうが喜びを素直に表現することや、負けたほうが悔しさをあからさまに滲ませるようなことがあっても良いと思います。ただそれとは別に、終局後の「負けました」「ありがとうございました」という挨拶を交わすことは将棋道場に通うどの子供たちにも身につけてほしいなと考えて、そのように指導をしています。やはり将棋道場に来る回数を重ねて、棋力が上がってくると、自然にそういう風に出来るようになってくれる子供たちのほうが多いです。

また最近は将棋を指しているときの姿勢なども注意をするようにしています。特に男の子たちは（自分もかつてそうだったのでよく分かるのですが）元気いっぱいで、対局中ずっと黙っておとなしく盤面に集中しているというのは難しいものです。それでも少しずつ、対局中はむやみにお喋りしないこと、できるだけ背筋を延ばして椅子に座ること、隣の対局に口を挟んだり助言したりしてはいけないこと、二歩・待ったなどの反則があったら素直に非を認めること、などを教えるようにしています。すぐに完璧にできるようにならなくても、何度か将棋道場に通ううちに、そういう態度を身につけていってもらえたらと思っています。

そういった礼儀がきちんと守れることと、将棋の棋力の伸びは長期的に見れば、必ず相関します。短期的には礼儀を守らずともどんどん棋力が伸びて勝ちまくる子もいますが、そういう子はどこかで必ずつまずきます。そうしてつまずいたときに、その壁を乗り越えられない場合も多い。逆に対局姿勢がしっかりしていれば、最初は棋力が伸びず勝ち悩んでいても、ある時点でぐっと棋力が伸びて、その後も順調に成長できる場合が多いです。

将棋道場に通ってくれる子供たちには、そんな風にして将棋の実力と対局中の礼儀作法、両方の面で成長していってもらえたら嬉しいです。